

巻頭言

国際経営研究所所長 石積 勝

—— 伝統と革新 ——

今回のフォーラムの共通テーマは「伝統と革新」ということなので、そのことに関連する短文をしたためたい。

「伝統と革新」——このテーマは大小多岐にわたる社会集団の運営にかかわる。小は家族や親類縁者、何々家の「伝統と革新」もあるだろうし、それぞれが身を置く共同体、例えば村や町、それを越えた地域の「伝統と革新」の問題もあるだろう。「会社の伝統と革新」も当然ある。今まで培ってきた会社の伝統をどこまで守り、革新的な施策をいつどの程度までリスクをとって採用するかは、まさに会社の命運にかかわるテーマである。経営層は「伝統と革新」などという大袈裟な言葉使いを好まないだろうが、「守りと攻め」という言い方で、リアルな「伝統と革新」を日々考えているだろう。そして強弱の差こそあれ、個人としての私たちも、守り時なのか攻め時なのかなどと様々なレベルで時々は考えたりする。その中で私のテーマはやはりマクロの政治や社会についてということになる。国家や社会ということになる。

思えばこの日本列島というアリーナに身を置くわれわれにとっては、この「伝統と革新」のせめぎ合いは、明治以降、常に悩みの種であり続けた。この伝統なのか革新なのかという悩みは特に非西洋社会では国家規模、あるいは宗教を含む文化圏規模で常に抱えるものだ。そして日本はこの問題にいち早く、そして全面的に直面した。明治の文明開化期以来、この「伝統と革新」の問題は（伝統的な）「日本文化」VS（革新的な）「西洋文明」

という枠組み設定と平行に論じられてきた。「文明開化」という言葉が示唆しているように、開明的・革新的な西洋文明に対して伝統的・保守的な日本文化という構図である。固有文化がどうしても受け身になってしまうこの構図は、もちろん「近代」、あるいは「近代社会」の圧倒的な迫力と拡がりを見せ、非西洋社会が簡単には乗り越えられないということと関係している。その中で日本でも過去何回か繰り返されてきた「近代の超克」論議、「排外と排外」論議は決して過去の歴史の話ではない。昨今の「グローバリゼーション」論議は新しくて古い、古くて新しい、テーマなのである。実際、このエッセイを書いている2018年12月中旬、国会では入国管理法が通過し、外国人受け入れ政策が大きく変わろうとしている。法案のよし悪しは別にしても、大量に外国人をこの日本に受け入れることにするのは、まさしく目に見える形でのグローバリゼーションの具体的な表れのひとつである。もちろん私たちが身を置く教育分野でもその内容も仕組みも、このグローバリゼーションの挑戦を受けて大きく変わらざるを得ないという状況である。

そういう激しい動きの中で具体的な大きな事件が起こった。日産会長カルロスゴーン氏の突然の逮捕・拘留である。

一企業内のクーデターという範疇を越えて、あるいはゴーンという強烈な個性の盛衰劇を越えて、どうやらこの事件は日本社会全体に向けられる欧米からの眼差しの大きな転換点になりそうだ。つまり日本の司法やマスコミやらの仕組みと常識が、そしてそれを支える日本社会の政治文化が、欧米の、あるいは近代社会の根っこの了解事項から逸脱しているのではないかという強い眼差しが生まれつつあるということだ。法と証拠に基づいて、ゴーン氏であろうが誰であろうが同じように被疑者として取り扱われること自体はまさしく西洋近代が獲得した開明的・普遍的な理念の具現化一法の下での平等一なのだが、そしてそれを忠実に実行する日本の検察・司法はその範囲内では確かに近代国家であるが、しかしそれにしても、それらを支えるさらに根本的な市民的権利の擁護や人権という、より根源的な

理解で、日本社会は、あるいは日本の司法や行政は、さらにマスコミは近代社会の原理から大きく乖離しているのではないかという欧米からの厳しい眼差しである。

推定無罪の原則からの逸脱。滝のように流れ出る一方的な検察からのリーク情報とその垂れ流し報道のありよう。別件逮捕の安易な適用。留置所での扱い。家族や弁護士などとの極端な面会制限。仮にゴーン氏がやはり有罪で、相当な重罪であることが裁判で明らかになったとしても、どうもこの日本に向けられる欧米からの強い違和感の眼差しは厳しく残るのではないか。かつて1970年・80年代に盛んに喧伝された日本異質論——日本資本主義は欧米の資本主義とは異質なものである。だからフェアではない。——のさらに深い次元での日本異質論、つまり単なる資本主義自由主義経済体制の問題を越えて、日本という社会は本当に近代社会の理念・価値を共有しているのかという視座からの、新たな日本異質論の到来すら予感させられるのだ。実際すでにこの時点でも米ウォール・ストリート・ジャーナル紙社説（「共産党が支配する中国の話だろうか。いや、資本主義の日本で起きたことだ。」2018年11月27日）その他で、そうした論調が出始めている。

さて問題は「伝統と革新」である。安倍総理は『日本を取り戻す』をスローガンに6年前に首相に復帰し長期政権を維持している。「日本を取り戻したい」空気が底流としてこの社会に流れていて、それが長期政権を支えているのだろう。問題は日本の「なにを」取り戻すのかなのだが、あるいは「いつの」日本を取り戻したいのかなのだが、とにもかくにも、開明的・進歩的「文明」ではなく、土着的・保守的「文化」へ全体としてこの社会のベクトルは振れているようだ。トランプの「アメリカ・ファースト」や欧州各国の「自国ファースト」と共振する「日本ファースト」の空気が確かにある。だが、しかしその日本ファーストが近代社会の理念・価値からの逸脱、撤退、あるいは単純な否認だとしたら、そしてそれを無自覚に進めていくなれば、その先に待ちうける相当なカタストロフィーをわれわ

れは覚悟しなければならないだろう。かつて日本は西洋近代の根本的価値・理念を内面化する前に情緒的に脱西洋を叫び、そして挫折した。もし万が一われわれの取り戻したい日本がその挫折に帰結したと同じような日本だとしたら、その場合は、それこそ「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」（ヘーゲル？マルクス？）ということになるだろう。